

第5回国際分子病理学シンポジウム鹿児島会議

2007年7月30日-8月2日、鹿児島大学桜ヶ丘キャンパス（鶴陵会館）、鹿児島、日本
鹿児島大学後援、日本病理学会後援（生涯教育ポイントの設定）

中国側会長：賈心善（中国医科大学）

日本側会長：蓮井和久（連絡役、鹿児島大）

日本側 学術部門世話人

名倉宏（東北大学）

朔 敬（新潟大）

阿部正文（福島県立医科大）

秦 順一（国立小児病院研究所）

長村義之（東海大）

加藤良平（山梨大）

大井章史（金沢大）

社本幹博（藤田保健衛生大、八千代病院）

堤 寛（藤田保健衛生大）

井内康輝（広島大）

菊池昌弘（福岡大）

竹屋元裕（熊本大）

佐藤榮一（鹿児島大）

蓮井和久（鹿児島大）

中国側 学術部門世話人

Xinshan Jia (Chima Med. Univ.)

Jinlong Ma (Xinjiang Med. Univ.)

Weigang Fang (Beijing Univ.)

Yulin Li (Jilin Univ.)

Daling Zhu (Harbin Med. Univ.)

Gaosheng Huang (No. 4 Military Med. Univ.)

Enhua Wang (China Med. Univ.)

Jifang Wen (Central South Univ.)

Gandi Li (Sichuan Univ.)

Jin Cui (Kumming Med. Coll.)

Jialun Wang (Shenyang Med. Coll.)

Min Su (Shantou Univ.)

Jiehua He (Zhongshan Univ.)

Yuanyi Xu (Ningxia Med. Coll.)

Maode Lai (Zhejiang Univ.)

Gang Chen (Shanghai Jiaotong Univ.)

Weixia Zhong (Shandong Tumor Hosp.)

Caili Han (Hebei Med. Univ.)

Shousong Chen (Guangzhou Military Area Wuhan Hosp.)

Jianwen Huang (Fujian Med. Univ.)

文化交流の世話人

佐藤榮一（鹿児島大）

連絡先

蓮井和久 鹿児島大学大学院医歯総合研究科感染防御学講座免疫病態制御学分野

890-8544 鹿児島市桜ヶ丘 8-25-1 TEL 099-275-5303 FAX 099-275-5305

E-mail: kazhasui@m2.kufm.kagoshima-u.ac.jp

連絡先（中国側）

賈 心善（中国医科大学）中国医科大学病理教研室

110001 中国遼寧省沈陽市和平区北二馬路92号

電話 86-24-23256666-5312

Email xinshanjia@yahoo.co.jp

公用語：英語（日本語—中国語の相互通訳が入る例外がある。）

抄録：A4一枚に発表抄録を英文 12 point times フォントで作成し、メールの貼付ファイルとして送付下さい。また、発表者自身や発表者の施設の紹介、発表者が実施しているか、今後実施予定、実施可能な施設でのショート研修コース等の紹介を抄録集に記載を希望される方は、A4一枚に記載して、抄録と共にお送り下さい。また、セミナー（特定のテーマに絞ったセミナー、30分前後）を希望される方は、同様の様式にて、セミナーの説明を、A4二枚程度で作成して、上記のメールアドレスに送付下さい。抄録集（中国で作成）には、上記の抄録並びに上記の紹介等を掲載の予定。

抄録等の送付先：ismp2007@yahoo.co.jp

抄録送付メール本文：所属、連絡先（電話、Fax、E-mail）、希望の発表形式（英語での口演、英語でのポスター）を記載下さい。

重要の日時：抄録送付〆きり：2007年6月15日（抄録集に掲載されます。）、2007年7月20日（ポスター発表になります。別紙として、抄録集と共に配付します。）

会費：10,000円（懇親会費を含む）、5,000円（懇親会に不参加）、5,000円（同伴者）

日本病理学会生涯教育ポイントは、参加証を専門医更新時に送付下さい。

第5回国際分子病理学シンポジウム報告

蓮井和久

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科健康科学専攻

感染防御学講座（難治性ウイルス疾患研究センター）分子ウイルス感染研究分野

2007. 7. 30- 8. 2、鹿児島会議

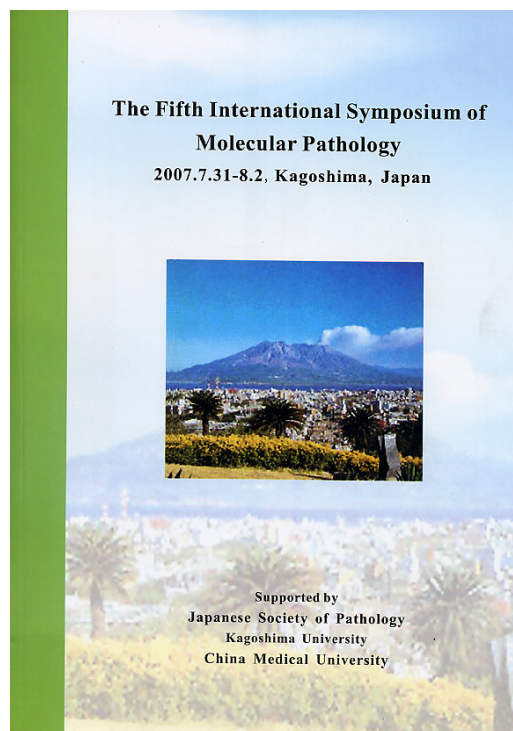
第5回国際分子病理学シンポジウム(ISMP2007)は、日本病理学会後援（専門病理医更新の為のポイント設定の学術集会と認定）、鹿児島大学後援、中国医科大学後援にて、中国側27名、日本側68名の参加で、2007年7月31日に、鹿児島大学桜ヶ丘キャンパス 鶴陵会館にて、開催された。今回のシンポジウムは、日中の病理学分野での交流の中で、日本（鹿児島）での開催で、これだけ多くの中国側の参加は、一つのマイルストーンとなった。

この第5回国際分子病理学シンポジウムを日本（鹿児島）で開催するには、幾多の課題があった。本来、中国内陸部での開催を行なって来たが、第4回シンポジウムの開催の準備中に、鹿児島大学本部より、次回は鹿児島での開催の要請があり、その後会議にて、審議にて、2007年の鹿児島での第5回シンポジウムの開催を決定した経緯があった。また、日本での開催であることから、日本病理学会の後援と専門医の資格更新の生涯教育のポイントの設定された学術集会の認定を頂くことが、条件となった。

1. 2006年11月から日本病理学会への後援依頼等を行ない、2007年3月に、日本病理学会の後援と学術集会の認定が得られた。

2. 2007年2月には、児玉奨学基金に申請し、国際学会主催の助成金（10万円）を受けた。

3. 鹿児島大学との関係の決定には、丁度、永田行博学長体制から吉田浩己学長体制への移行が重なり、難航を極めた。吉田学長との面会や電話を重ねたが、学長の意志の伝達不十分か、関係部署での事務処理が一向に進まない。最後に判明したのは、学長体制の移行に伴い、理事会とは別に大学本部事務サイドの意向の反映が行なわれた一方で、その賛否の問題は別として、個々の学会等の開催に大学本部は直接関与すべきでないと言う考え方が大きくなった時期に遭遇したようである。決定が延び延びとなった後に、兎も角、このシンポジウムへの大学本部の対応が検討された結果、学外団体主催の学会への後援と云う所で落ち着いた。



抄録集

この決定の遅れとその対応により、大きく鹿児島での組織委員会の構成が当初の予定と異なり、準備時間の短かさ、シンポジウム会場となる鶴陵会館の使用料の問題が発生して来た。丁度、児玉奨学基金の助成金が抄録集制作費用と会場使用料に消えることになった。

また、ポスター発表も企画する必要があったので、鹿児島には舞台関係業者には病理関係のポスターの大きさのものが無いことが判明し、特注し準備することにした。

鹿児島での組織委員会は、最終的には、
 シンポジウムプログラム委員会：賈心善、蓮井和久、日中の世話人
 日本側組織委員会：蓮井和久

- 1) シンポジウム実施部門：蓮井和久、松山隆美、栄鶴義人、出雲周二、西村俊秀、永井拓、田中将志、音田道治、奥村晃久
 - 2) 文化交流部門：佐藤栄一（敦煌会代表）、野添良隆（敦煌会事務局長）、早田隆（敦煌会理事）。
 - 3) 社会連携部門：野添良隆、日高旺（敦煌会顧問）、早田隆、平山申清（敦煌会理事）。
- と、学内の関係者と学外（多くは鹿児島大学（OB））、関係者（敦煌会：第1回シンポジウムに鹿児島から参加した有志の会）で構成されることになった。

4. 記念文化講演を実施することにして、野添良隆先生に、徐福伝説について講演願うことになった。この経緯は、鹿児島大学後援が決定して、ある学会からの帰路で関西空港で飛行機の遅れが生じた時に、思案中に野添良隆先生に電話すると、今、敦煌会の企画で八代海

のうたせ舟に乗船中との由にて、”徐福に関する文化講演”をお願いした所、快諾が得られたのである。

5.鹿児島での準備の遅れと共に、中国側でも、大きな問題が生じていた。

中国側参加者は、中国各地から一つの旅行団を構成してグループ旅行として日本を訪れる計画であったが、中国国内の逃亡保証金制度により旅費以上の保証金を各自が準備する必要が生じ、日本側の団体ビザの取得では日本のビザ申請の窓口が複数あるも、それぞれの地域を超えた団体の旅行を認めていない現実が明らかになった。

また、中国からの団体旅行には、モデルコースが設定されており、そのコースから外れた旅程は、費用も高騰し、時間的な余裕もなくなる実状も明らかになった。

この状況を克服して、中国医科大学のある遼寧省の病理関係の団体旅行として来日が可能となった。

その副産物か、中国医科大学の病理学出身の書記（副学長）が参加することになり、シンポジウムに合わせて、鹿児島大学の学長への表敬訪問が実施されることになった。

中国側は、当初の訪問日程等が上記の諸条件にて、7月29日に大連を経由して、翌30日に、大連-福岡便で入国し、博多からリレーつばめと新幹線つばめを乗り継ぎ、7月31日の午後7時過ぎに、鹿児島中央駅に到着した。一向を鹿児島中央駅で出迎えて、賈心善教授をピックアップして、組織委員会と敦煌会の例会のある熊襲亭に向った。

組織委員会には、大学本部から、愛甲孝理事と徳永喜代子国際交流課課長代理の参加を得て、鹿児島以外からは、名倉宏教授、朔敬教授、堤寛教授、大井章史教授夫妻、井内康輝教授の参加を得て、盛会であった。





シンポジウム

2007年（平成19年）7月31日（火曜日）は、シンポジウム当日である。

関係者は、8時半に集合し、ポスター準備。9時には、受付を開始した。9時半過ぎには、中国側も会場に到着した。



10時に、賈心善教授による開会宣言にて、開会した。



賈心善教授の開会宣言、米教授の通訳、KKBテレビカメラも入った。後日、この開会式の様子が報道された。

President of Kagoshima University の挨拶は、愛甲孝理事が行ない、このシンポジウムの継続に貢献したとして佐藤榮一名誉教授と私の活動に言及して頂いた。President of China Medical University の挨拶として、Prof. Wanjin Dai が挨拶した。



それに続き、佐藤榮一名誉教授の司会により、野添良隆先生の A legend of the coming of Jofuku in Japan (徐福伝説) の文化講演が、王嘉先生の中国語への翻訳にて、行なわれた。野添良隆氏の講演”天孫降臨と徐福伝説”は、鹿児島西ロータリークラブのHPにて、公開されている。

その後、シンポジウムは、

1. Kouki Inai の座長による Yifu Guan. Ultrasensitive nucleic acid detection with nano-structured biosensor and possible application to SNP identification

2. Yifu Guan の座長による Kouki Inai. Seminar on pathological diagnosis of mesothelioma

の特別講演が行なわれた。

Yifu Guan、Kouki Inai、Yifu Guan、Kouki Inai、Yutaka Tsutsumi、Xiaoyi Mi



この時間に、徳永喜代子課長代理と共に、大学の車で、大学本部に向い、中国医科大学の Prof. Wanjin Dai と賈心善教授の吉田浩己学長への表敬訪問が行なわれ、私も同席した。



昼食会は、松山隆美教授主催のランチオン情報交換会として、鹿児島大学生協の桜ヶ丘キャンパスの食堂で、生協食堂部からの仕出しにより、行なわれた。予想以上に、中国側はにぎり寿司やオードブルが気に入り、酢飯を使ったいなりやのり巻きが初物として敬遠された。

午後1時半に、同伴者プログラムの桜島観光と鹿児島水族館が出発した。

同時刻に、Xiaoyi Mi の座長で、Yutaka Tsutsumi. Application of histo- and cytochemical techniques to pathological diagnosis of infectious diseases.の特別講演が実施された。

右写真：Daorong Zhang、Nagura H、Xiaoyi Mi、Akishi Ooi、Yujie Zhao、Guangping Wu、Kazuhisa Hasui

1. Nagura H 座長の Daorong Zhang. Expression of TSG101 in squamous cell carcinoma and Adenocarcinoma of Lung
2. Daorong Zhang 座長の Nagura H. The Evaluation of a Diagnosis of Prostatic Adenocarcinoma in Needle Biopsy Specimens by Immunohistochemistry



3. Akishi Ooi 座長の Xiaoyi Mi. Expression of TRAF1 and TRAF2 and Their Interaction in the Different Metastasis Breast Cancer Cell Lines

4. Yujie Zhao 座長の Akishi Ooi. Non-incident co-amplification of Myc and ERBB2, and Myc and EGFR, in gastric adenocarcinomas

5. Kazuhisa Hasui 座長の Guangping Wu. The clinical application of Liquid-based Cytological Test to the screening of sputum cytology for the diagnosis of lung cancers
の講演の後に、コーヒブレイクとなった。

このコーヒブレイク中に、中会議室でのポスター発表の検討が行なわれた。予想以上の熱心な検討が行なわれた。

ポスター発表は、

1. Kazuhisa Hasui: A nasal NK/T-cell lymphoma in the northeast region of China、

2. Jia Wang: An immunohistochemical analysis of proliferation, apoptosis and stem cell phenotype expression in human testicular spermatogenesis、

3. Shinya Kojima: Altered Ghrelin and PYY responses to meals in bulimia nervosa、

4. Satoshi Maruyama: Salivary gland tumor cells in hypoxic condition の4題であった。

このコーヒブレイクでは、同窓会室の甫立さんと松山さんの協力による抹茶サービスは非常に美味しいと好評であった。コーヒサービスの所謂10円饅頭も、懐かしい味と好評であった。

その後、

1. Guangping Wu 座長での Motohiro Takeya Class A Macrophage Scavenger Receptor (CD204) Attenuates the Risk of Cardiac Rupture After Experimental Myocardial Infarction、

2. Eiichi Sato 座長での Mingchuan Li の Impact of XRCC1 polymorphisms Arg399Gln



and Arg194Trp on risk of lung cancer in non-smoking women、

3. Motohiro Takeya 座長での Yujie Zhao. To Study Immunophenotyping of acute leukemia by a cell microarray、

4. Yifu Guan 座長での Masashi Tanaka. The Z39Ig: a specific marker of synovial A cells in RA synovium、

5. Yutaka Tsutsumi 座長での Huailing Wang. Pulmonary hypertension mechanism.: Relevance to 5-hydroxytryptamine, receptors and transporters、

6. Yujie Zhao 座長での Shuji Izumo. HIV encephalitis and diffuse microglial activation occur independently in the brain of HIV-1 infected patients、

7. Guangping Wu 座長での Akihiro Asakawa. Ghrelin and growth hormone secretagogue receptor as therapeutic targets for obesity and type 2 diabetes.、

8. Xiaoyi Mi 座長での Sukalyan Kundu. Differential expressions of retinoid receptors in oral squamous cell carcinomas.

の講演があった。

Motohiro Takeya、Guangping Wu、Mingchuan Li、Motohiro Takeya、Masashi Tanaka、Yifu Guan、Huailing Wang、Yutaka Tsutsumi、Shuji Izumo、Yujie Zhao、Akihiro Asakawa、Sukalyan Kundu



最後に、私がこのシンポジウムの閉会を宣言した。そして、シンポジウムの横断幕を背に、記念写真を撮った。

皆で、用意してあるバスにて、懇親会のあるサンロイヤルホテルに向った。私は、懇親会会場に運ぶ荷物があつたので、野添良隆先生と奥村晃久先生を乗せて、私の車でサンロイヤルホテルに向った。

懇親会会場の前の受付には、室屋さん、王さん、車さんが待機していたが、敦煌会以外の鹿児島の日中友好の団体からの参加があるかも知れないと云うことであったが、懇親会のみ参加者は無かった。

懇親会は、午後7時からサンロイヤルホテルのエトワールの間で開催された。進行は、私と賈心善教授で行なった。最初の挨拶は、佐藤榮一名誉教授にお願いした。突然のお願いにも、佐藤榮一名誉教授はユーモラスな挨拶をして、拍手が湧いた。乾杯の音頭は、ランチオン情報交換会を主催して



頂くと共に、教室の全面的な協力を配慮して頂いた松山隆美教授にお願いした。この懇親会には、賈心善教授の旧知である小政酒造の社長からの焼酎の差し入れがあり、焼酎コーナー等が設けられていた。また、懇親会中に、小政酒造社長夫妻が賈心善教授を訪ねて来られた。

この懇親会では、野添良隆敦煌会事務局長の発案にて、皆勤の日本側参加者を日中の病理学の交流に寄与したということで、名倉宏教授、井内康輝教授、堤寛教授を表彰することになった。野添先生からの助成は、記念品の薩摩切子のペーパーウェイトとなった。表彰された先生方は、少なからず驚かれたようである。

懇親会に出席されなかった井内康輝教授には、表彰状と記



念品を宅急便にて送付した。
懇親会は、8時半には、あっ
さり終わった。

表彰



中国の宿泊している東急ホテルのロビーで、賈心善教授や旅行社の呉海瀨さんと遅くまで談話した。この談話にて、前記の中国側の団体旅行での問題点が明らかになった。

翌日、早朝に、中国側は大阪に向って、新幹線で出発した。その後を追う様に台風が九州に上陸したが、その影響は受けずに、大阪、京都、東京を観光して、元気に、成田から大連便で帰国したとのメールが届いた。中国側は、今回は、非常に大きな成功であると評価したそうである。